

巨木を巡る

大牟田の数百年を見てきた木々を見に行こう！



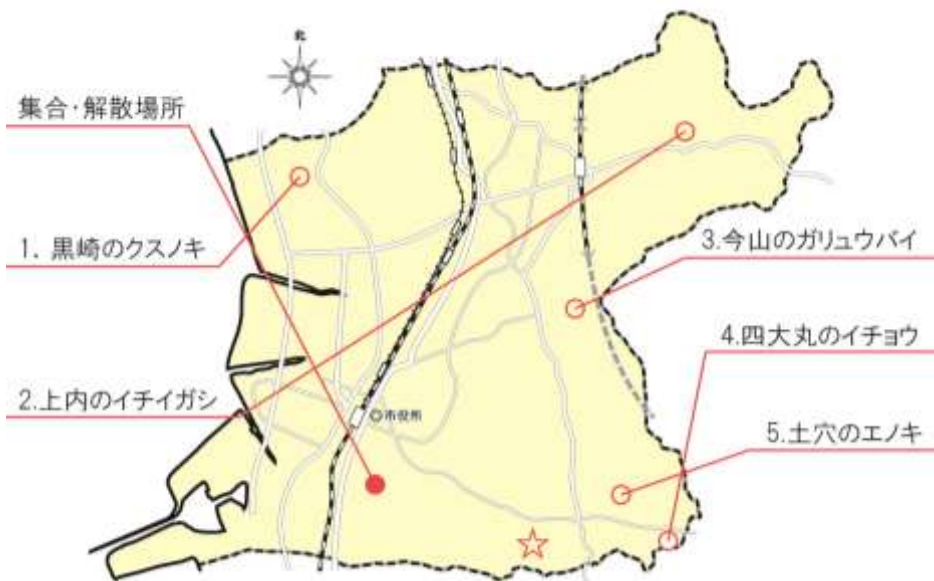
主催 大牟田市
協力 大牟田生物愛好会

奈良時代に編さんされた日本書紀には、大牟田市にはかつて巨大なクヌギの木があったと記されています。

日本書紀によると、四世紀初めころ、ときの天皇が大牟田の地に立ち寄ったとき、クヌギはすでに倒れていましたが、その倒木を見た天皇が「これは神の木だから、これからはこの地を御木の国と名づけよ。」といわれたのが三池の名前の由来だと伝えられています。

大牟田には今も、樹齢が数百年を越える巨木があります。巨木の多くは人里離れた藪の中ではなく、身近な場所で大切に守られてきました。

今回のバスハイクは、これらの巨木を巡ります。先人たちが大切にしてきた、大牟田の数百年を見てきた木々の観察をとおして、本市の自然環境に関心を深めてもらえれば幸甚です。



大牟田の主な巨木

行程

時間	巨木	場所
9:00～	受付開始	生涯学習支援センター
9:30～	出発	
9:50～10:25	黒崎のクス	玉垂神社
10:45～11:20	上内のイチイガシ	上内八幡宮
11:45～13:00	今山のガリュウバイ	普光寺
13:20～13:50	四大丸のイチヨウ	正住寺
14:00～14:30	土穴のエノキ	
～15:00	解散	生涯学習支援センター

1. 黒崎のクスノキ

(玉垂神社)

みどころ

本市最大の巨木で、樹齢は300年以上と推定されています。

幹の周りは4メートル弱、木の高さは27メートルあります。高さは、日本最大のクスノキ（鹿児島県始良市蒲生町、幹周り24.2メートル、木の高さ30メートル、樹齢推定1,500年）に匹敵します。1969年、大牟田市の天然記念物に指定されました。

幹にはノキシノブ、フウトウカズラ、テイカカズラ、キツタなどが着生して荘厳、堂々とした風格を漂わせており、神木として信仰の対象となっています。

クスノキについて

クスノキ科の常緑高木。九州など温暖帯の照葉樹林の代表的構成種。

食用のアボカド、線香の原料になるタブノキ、香料に使われるシナモンに近い仲間。

枝葉を蒸留して得られる無色透明の固体は、樟脳（カンフル）と呼ばれ、防虫剤や医薬品等に使用される。全体に特徴的な芳香を持つ。

名前の由来は「薬の木」とも「臭いの木」ともいわれている。

黒崎玉垂神社について

和銅5年（712年）11月、武内宿禰を祀ったのが黒崎玉垂神社の始まりと伝えられています。

ここに、自分で撮影した写真（Lサイズ）を貼ろう

メ モ

2. 上内のイチイガシ

(上内八幡宮)

みどころ

大牟田には、櫟野（いちの）という地名がありますが、イチイガシ（櫟榿）は大牟田市域には多くありません。

このイチイガシは幹の周りは3.4メートル、木の高さは25.7メートルの堂々とした巨木で、樹齢は200年以上と推定されています。（日本最大のイチイガシは大分県豊後大野市にあり、幹周り12メートル、木の高さ20メートル。）1966年、大牟田市の天然記念物に指定されました。

イチイガシについて

ブナ科の常緑高木。カシ類では例外的に、果実（どんぐり）をあく抜きせずに食べることができる。材は強く堅いので、建築材・家具や器具の材などいろいろな用途に用いられる。

名前の由来は厳かなカシという意味で「厳（イツ）+カシ」とも、位の高いカシという意味で「一位+カシ」ともいわれている。

上内八幡宮について

承平天慶の乱（平将門の乱・藤原純友の乱）のころに当たる、承平7年（937年）5月、三毛師方が丑寅の方角（表鬼門）の守護神として八幡神を勧請創建されたと伝えられています。

ここに、自分で撮影した写真（Lサイズ）を貼ろう

メ モ

3. 今山のガリュウバイ

(普光寺の臥龍梅)

みどころ

幹や枝が地面を這い、所々で根を張って母樹から独立して叢生状（そうせいじょう）になるものを臥龍といいます。

庫裏前広場側に母樹の株をもつ臥龍梅は、古幹が地面を北に這い、全長 24メートルに及び 17 株の叢（そう）が連なっています。（日本最大の臥龍梅は鹿児島県薩摩川内市にあり 50 株の叢が連なっている。）1958 年、大牟田市の天然記念物に指定されました。樹齢は 450 年以上と推定されています。

早春の二月下旬ころには見事な八重咲の紅梅をつけ、多くの市民を楽しませてくれます。

ウメ（臥龍梅）について

バラ科サクラ属の落葉高木。奈良時代に遣隋使が中国から持ち帰ったと伝えられている。アンズと容易に交雑するが、実は完熟しても甘くならない。未熟な青梅には青酸が含まれており、大量に食べると中毒を起こすことがある。

江戸時代以降、花見といえばサクラだが、奈良時代の花見はウメであったともいわれている。

名前の由来は渡来当時の中国語の発音（マイ・メイ）がなまったものといわれている。

普光寺について

弘仁 14 年（823 年）、筑後国三池郡の郡司として下向した嵯峨天皇の皇子が建立されたと伝えられています。市内で最も古い寺院のひとつです。

所蔵の木造薬師如来坐像、木造慈恵大師坐像、不動明王板碑は県の文化財に指定されています。

ここに、自分で撮影した写真（Lサイズ）を貼ろう

メモ

4. 四大丸のイチヨウ

(正住寺)

みどころ

鐘楼と納骨堂との間にそびえるイチヨウは、本市のイチヨウの中でも最大級のもののひとつで、樹齢は300年以上と推定されています。

雄株のため、銀杏（ぎんなん）はなりませんが、丘陵の際（きわ）に立っているため、県道側から眺めると深緑の背景に黄金の輝きを放つ秋の紅葉が特に美しく、見ごたえがあります。

イチヨウについて

裸子植物イチヨウ科の落葉高木。雌雄異株（雄株と雌株が違う）。イチヨウ綱の唯一の現存種であり、生きた化石といわれる。

中国原産。仏教の伝来に伴って、平安時代から鎌倉時代のころに日本に伝わったと考えられている。

実（み）の銀杏（ぎんなん）は食べられるが、食べ過ぎると中毒を起こす。

材は油分を含み水はけが良く加工性にも優れるため、家具・建具など広範に利用される。イチヨウのまな板は特に高級とされる。

火に強く江戸時代には火除け地に良く植えられた。

名前の由来はイチヨウ・ギンナンともに中国語の発音がなまったもの。

正住寺について

戦国時代、今の荒尾の地に勢力を持っていた小岱氏の菩提寺として建立されたのが始まりといわれています。

寺は戦国時代の竜造寺氏との戦乱で一度消失しました。今から300年前に寺が再建されたときには、境内には既に二本のイチヨウの木が生えており、そのうちの一本が今日まで残っていると伝えられています。

ここに、自分で撮影した写真（Lサイズ）を貼ろう

メ モ

5. 土穴のエノキ

みどころ

自然あふれるのどかな田園風景が広がる里地の石垣の丘に、伸びやかに枝葉を張り出した姿は、日本の原風景を思い起こさせます。

樹齢は300年以上と推定されています。

自然の樹形を保った形の良い巨木で、生育も盛んで、1979年に県の天然記念物に指定されました。

この巨木の近くには、その種子から生育したと思われるエノキ（幹の周り約1.5メートル）が二本、親木を見守るように育っています。

エノキについて

ニレ科の落葉高木。雌雄同株だが、葉と同時期（4月ころ）に葉の根元に咲く小さな花には雄花と雌花がある。

果実は直径5～6ミリメートルの球形で、熟すと橙褐色になり、食べられる。味は甘い。

家具や建材、薪炭などに使われる。風合いが似ていることからケヤキの代用とされる。材質はやや堅いが、強度は強くなく、狂いも生じやすい。

江戸時代には街道の一里塚として植えられ、野生の木も多く、地名や苗字になっている例も多い。

名前の由来は「枝が多いから」、「鋤などの農機具の柄（え）に使われたから」など多くの説がある。また、ヨノキ、ユノキなど多くの別名をもつ。

土穴について

大昔、櫛野の北部山ろくに奥深い穴があったのが由来とも伝えられています。

巨木・古木の多くは社叢林（しゃそうりん：鎮守の森）として守られて長寿を保つケースが多い中で、この地のエノキは、農村の一角にもかかわらず長い歳月大切に守られてきたことには深い感慨を覚えます。

ここに、自分で撮影した写真（Lサイズ）を貼ろう

メモ

A large rounded rectangular box with a thin grey border, containing 20 horizontal black lines for writing. The lines are evenly spaced and extend across most of the width of the box.

Blank lined area for writing.

問合せ先

大牟田市役所 環境部 環境企画課
電話 41-2738

大牟田生物愛好会
会 長：嶋田 雅俊 52-5629
事務局：矢納 明子 55-2874